
記憶のおくのそこ

落ちぶれた天使

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

記憶のおくのそこ

【Nコード】

N1902Z

【作者名】

落ちぶれた天使

【あらすじ】

コナンと哀はふとしたことから7歳までしか記憶がなくなります。そこから組織につながっていき・・・

記憶（前書き）

ああああああああああああああああ

記憶

いまは帰り道。

小学生になっちまった俺、江戸川コナンこと工藤新一と、

同じくはいばら哀こと宮野志保。

そして探偵団の3人。

かろうじてまだ正体はばれてねえけど、

ナンつかこう、イヤな予感がするんだよな。

そんなことを考えていたとき、元太がいまにも切れそうな紐で縛つてある鉄パイプの山にのぼっていった。

かるくコナン達の身長の倍ある。

げんたはそれをむりやりよじのぼっていく。

光彦「なにやってるんです！？げんたくん！！あぶないですよ！？」

歩美「そーだよ！おりなよ！！」

げんた「しゃーねーだろっ俺のアイスの当たり棒が上にのっちまっただから！！」

コナン「おいげんたあ」

哀「あきらめるのね。」

げんたガ無事おりてきて安心しとき・・・

ガラッ！！

すさまじい音をたててひもが切れ、鉄パイプがふつてきた。

コナンはげんたと光彦をむりやりおして哀は歩美をおしだした。

歩美達は鉄パイプからのがれた。

が、

コナンと哀は鉄パイプの下敷きになってしまった。

歩美「コナンくん！哀ちゃん！！」

げんた「きゅ、救急車だ！！」

光彦「はい！」

二人は頭から血をだしていていしきがない。

じきに救急車がきて二人は病院に搬送されていった。

大阪の探偵とそのガールフレンドや、蘭、小五郎。博士、えり、園子、そして歩美、げんた、光彦は手術中とひかる二つのランプの前にすわっていた。

探偵団や蘭は泣いている。

同時にランプがきえた。

ドアからは医者と手術用のベットにのせられた二人がでてきた。

みんなは医者と二人にかけよった。

蘭「こ、コナン君と哀ちゃんは!？」

医者「二人とも幸い傷はあさかったのもう大丈夫でしょう。」

この言葉でみんなは泣きあつようにしてよろこび二人の病室にむかった。

二人がめざめると・・・

コナン「ん・・・?」

蘭「あ、コナン君!分かる? 蘭おねえちゃんだよ?」

コナン「お姉ちゃんだれ? 蘭はもっと小さいよ。それに俺の名前は工藤新一だよ?」

蘭「え?」

全員がかたまった。

はかせと服部はただあたふたしている。

小五郎「お、おいコナン！おれだ！毛利小五郎だ分かるか！？」

コナン「おじさん？どうしたの？いきなり年とったみたい。それに蘭はどこ？」

蘭「わ、わたしよ！蘭はわたしだよ？」

コナン「え？だって蘭は俺と同じ7歳だよ？それにここにいる人たちみんな誰？博士もいきなりなんで白髪になったの？」

全員はまた目をみひらいた。

哀「んん・・・」

哀が起き上がった。

歩美「あ、哀ちゃん！大丈夫？」

哀「あれ、あなただあれ？それにわたしは宮野志保だよ。哀じゃないよ？」

やっと服部と博士は理解した。

コナンと哀の記憶が本当の7歳までしかなくなってしまったことに。

きさき「記憶喪失、としてはおかしいわよね・・・？」

コナンと哀はまだ目をくりくりさせてみしらぬ人達を見上げている。

服部「ど、どうなってんねやろな？」と、とりあえずかずは、医者よんできい。」

服部はあわてていった。

〈診察後〉

医者「傷のほうはあさいんで退院は明日していいんですが、これは一時的な記憶喪失ですね。いつかはなおるとおもいますが・・・」

医者はそれだけいうとでていった。

〈そして次の日〉

哀とコナンはとりあえず、服部もつきそって博士のうちにとまることになった。

歩美「ねえ博士。明日トロピカルランドにいかない？」

博士「おおそうじゃな。蘭君が記憶喪失のときもいったしのお。みんなでいくかのお。」

光彦「よかったですね」

歩美「あ、それと」

歩美はコナンの手と哀の手をとるといった。

歩美「わたしは吉田歩美。コナン君と哀ちゃんと同じ7歳よ。歩美ちゃんってよんでね」

げんた「俺は小島げんた！おれもお前らとおなじ7歳だ。げんたくんってよんでくれよな！それとおまえらと歩美と光彦でくんだ少年探偵団のリーダーだ！」

光彦「ぼくは円谷光彦です！僕も7さいです！光彦君ってよんでください！！」

コナン「俺は工藤新一！7歳！新一君ってよんでくれ！」

哀「わたしは宮野志保！7歳だよ！志保ちゃんってよんでね！」

コナン達のはつげんに目を点にしていたが、またはしりだした。

記憶（後書き）

ああああああああああああああああああ

正体（前書き）

ああああああああああああああああ

正体

いまはトロピカルランド入場口前

哀「あれ？テレビのカメラがいるよ」

光彦「実は、今日おそらく10万人目の客がでるらしいです！」

哀「へえ。」

そういうとコナン、哀歩美げんた光彦はかせ、服部はチケットをわたしてはいつていった。

だがコナンがとおろうとしてチケットをわたしたときクラッカーがなった。

コナン「へ？」

職員「ぼつや、おめでとーぼつやはここの10万人目のお客さんよ」

コナン「やったー！」

げんた「いいな」

歩美「コ、あ、新一くんすーいー！ー！」

博士「よかったの新一！」

キャスター「よかったね。僕。名前なんていうの？」

新一「えっとね、工藤新一、7歳！」

キャスター「新一くんか」ほかのお友達の名前も紹介してくれる？」

哀「わたしは宮野志保！7歳だよ」

服部はおどしながらはかせにはなしかけた。

服部「いま、あの二人やばいことゆうたよなあ・・・？」

博士「こ、ここのチャンネルは視聴率たかいぞ・・・」

子供達はにこにこしながらこたえている。

哀は帽子なんてかぶってないし、コナンもめがねをかけていない。

ということとは、瓜二つなのだ。

インタビューをおえた二人を服部はだきあげた。

あがさはほかのこたちのてをとってはしりだした。

コナン「なにすんだよ」大阪の兄ちゃん」

哀「わたしあそこで遊びたあい」！！」

服部「我慢せい！！！！」

服部は二人をビートルに乗せた。

次に博士が他の子達をいれた。

みんなぶーぶーって文句をいつている。

それから博士は車をだしてでていった。

「そのころジン、ウォッカ」

ウォッカ「相変わらずみつきりませんね。シェリーのやつ。」

ウォッカとジンはテレビをみていた。

テレビ「ぼく、名前、なんていうの？」「えっとね、工藤新一！7さい！」「

ジンとウォッカの目線がいつきにテレビにむかった。

テレビには死んだはずの少年うつたつの子供がうつっている。

テレビ「新一くんか」他のお友達の名前も教えてくれる？」「わたしは宮野志保、7歳だよ！」「

次はシェリー煮の少女がうつっている。

ジンはわらった。

ジン「おもしろいじゃねえか。こいつら二人、ここに連れて来い。」

ウォツカ「了解。」

正体（後書き）

ああああああああああああああああ

暖かい存在

工藤邸

コナン「なんでかえってきちまったんだよ」

哀「つまんない」

コナン「あ、そうだ大阪の兄ちゃん、蘭知らない？俺とおない年の女の子んだけど最近みないんだよなあ。」

平次「え、あ、すまん、しらんわ。」

コナン「そ、つか……。」

コナンは悲しそうな優しそうな目でいった。

それを哀がのぞきこむ。

哀「新一君、そのこのことすきなのか？」

コナン「ん？まあ世界で一番うしないたくないやつ、カナ？」

哀「志保も新一君のこと好きだよぉ♪だって私日本人のお友達新一君がはじめてなんだもん！」

コナン「へえ。俺は蘭だよ。まったくどこいつちまったんだろ……？」

服部「世界で一番……か。お前もようゆっわなあ。」

コナン「そう？でも兄ちゃんにもいるんだろ？蘭みたいな、絶対にうしないたくないやつ。」

服部「へ？どうしてそないなことわかつたんや？」

コナン「兄ちゃんの目。幸せそうな、絶対にあいつだけは守りたいっていうか、よくいえないけどそんなきれいな色してる。俺もそういうやついるからさ、だから分かるのかも。それに、」

服部「それに？」

コナン「兄ちゃんとはどっかであったことがあるきがするんだ。俺も、

心から頼れたやつでいざというときはおっちょこちょいだけど、守りたいやつを必至でまもるやつだって。そういうふうになんかよくわかんねえけど、記憶されてんだ。」

服部「やっぱ、工藤、やな・・・」

コナン「え？」

服部「いや、なんでもあらへんで。」

そういうと哀とコナンはトランプをして遊び始めた。

コナンの目は、なんだかさびしげで、でも綺麗に澄んでいて。

なぜだか胸がしめつけられた。

その少年は、

強くもあり、

弱くもあり、

なんだかよく分からない存在。

でもみんなが必要として、

そのぬくもりにつつまれて、

逆につつまこんで、

小さい背中とは裏腹におおきな背中。

みているだけで、

顔がほころんでくる。

そう、

暖かい存在。

平次は、

その少年をあらためて、

親友だと思った。

普通の女の子（前書き）

歩美と哀の話です

普通の女の子

ここは工藤邸のある一室。

歩美と哀がすわりこんでいる。

歩美「ねえ哀ちゃん、なんで自分が志保だと思うの？」

哀「私は宮野志保以外のなんでもないよ。私は宮野志保だって。それを忘れたらいけないって。記憶の中にしっかりきざみこまれてるの。だから私は宮野志保だからね」

歩美「ふうん。じゃあさ、好きな子いる？」

哀「うん、やっぱり新一君！！はじめてのお友達だもん！！それにずっと前から好きだった気がする！！」

歩美「えへ。じゃあ歩美とライバルだね。でもこれからもずっと友達だよ」

哀「うん！！」

歩美「でもね、コナン君は蘭お姉さんのことがすきなんだ・・・」

哀「蘭、お姉さん？」

歩美「うん！とってもやさしくて綺麗で、私の憧れの人！！」

哀「ふうん。」

あゆみ「あ、明日ここに来るっていったよ！」

哀「歩美ちゃんもくるの??」

歩美「歩美わ・・・こよっかな」

哀「うん！じゃあ楽しみにしてるね！！」

歩美「あ、あのさあ、メイク、してみない？」

哀「メイク？」

歩美「私と哀ちゃんで行ったことあるんだよ！やろうよ！電話で有希子おば、お姉さんにメイク道具かして、っていいばいし。あ、蘭おねさんと園子おねさんもよんでここでパーティーしよ！泊り掛けのゝもうすぐクリスマスだし。プレゼント交換とか。いまからいっしょにプレゼントつくろうゝ」

哀「うん！博士にいつてくるゝ」

歩美「歩美もいくゝ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1902z/>

記憶のおくのそこ

2011年12月19日14時46分発行